

2025（令和7）年度 第1回 知床世界自然遺産地域

適正利用・エコツーリズムワーキンググループ

議事概要

日時：2025年8月1日（金）12：30～15：30

場所：斜里町産業会館 2階大ホール

<議 事>

- （1）知床エコツーリズム戦略の見直しについて
- （2）インタープリテーション全体計画の進捗について
- （3）その他

<出席者>

適正利用・エコツーリズム 委員

北海道大学大学院 農学研究院 教授	愛甲 哲也	
弘前大学 名誉教授	石川 幸男	web
北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 准教授	石黒 侑介	web
金沢星稜大学経済学部地域システム学科 講師	船木 大資	
株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役	松田 光輝	
北海道立総合研究機構 エネルギー・環境・地質研究所 専門研究員	間野 勉	

以上、五十音順

科学委員会委員長

北海道大学 名誉教授	中村 太士	欠席
------------	-------	----

以上、設置要綱記載順

関係行政機関

斜里町 産業部 商工観光課 課長	南出 康弘	
同 総務部 環境課 課長	塩 幸也	
同 総務部 環境課 自然環境係 係長	吉田 貴裕	
羅臼町 企画財政課 参事	三宅 悠介	web

事務局

環境省 釧路自然環境事務所 所長	岡野 隆宏	
同 釧路自然環境事務所 国立公園課 課長	渡邊 雄児	
同 釧路自然環境事務所 国立公園課 世界自然遺産専門員	鈴木 郁子	
同 釧路自然環境事務所 国立公園課 生態系保全等専門官	酒井 優太	web
同 釧路自然環境事務所 ウトリ自然保護官事務所 首席国立公園保護管理企画官	二神 紀彦	
同 釧路自然環境事務所 ウトリ自然保護官事務所 国立公園利用企画官	伊藤 薫	
同 釧路自然環境事務所 ウトリ自然保護官事務所 国立公園管理官	渡邊 寛明	
同 釧路自然環境事務所 羅臼自然保護官事務所 自然保護官	葉山 翔太	
林野庁 北海道森林管理局 計画保全部 計画課 課長	寺村 智	web
同 北海道森林管理局 計画保全部 自然遺産保全調整官	長崎 正明	web
同 北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター 所長	川崎 文圭	
同 北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター 生態系管理指導官	作田 明	
同 北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター 自然再生指導官	玉川 晴幸	
同 北海道森林管理局 網走南部森林管理署 署長	山之内 弘幸	
同 北海道森林管理局 網走南部森林管理署 総括地域林政調整官	清水 亜広	
同 北海道森林管理局 根釧東部森林管理署 署長	鷹野 孝司	
同 北海道森林管理局 根釧東部森林管理署 野生鳥獣対策官	細谷 誠	
北海道 環境生活部 自然環境局 自然環境課 課長補佐	小峰 健一	web
同 環境生活部 自然環境局 自然環境課 主任	濱田 怜奈	web
同 環境生活部 自然環境局 野生動物対策課 主任	三好 岳志	web
同 経済部 観光局 観光振興課 主幹	佐藤 雅代	web
同 経済部 観光局 観光振興課 主事	松原 巧実	web
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 課長	寺山 貢平	
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係長	小川 耕平	
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 主事	宮崎 祐伍	
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 主事	加藤 亮平	
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 知床分室 主幹	三井 義也	
同 根室振興局 保健環境部 環境生活課 課長	浅井 康孝	
同 根室振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係長	河崎 淳	
同 根室振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係 技師	西嶋 圭	
国土交通省 北海道運輸局 釧路運輸支局 首席運輸企画専門官(総務企画担当)	田中 斉	web
同 北海道運輸局 北見運輸支局 企画輸送・監査担当官 首席運輸企画専門官	高松 正繁	web

運営事務局

公益財団法人 知床財団	事務局長	玉置 創司	
同	事業部 部長	山本 幸	web
同	調査研究室 主任研究員	秋葉 圭太	
同	事業部 羅臼地区事業係 係長	坂部 皆子	
同	事業部 羅臼地区事業係 主任	谷 洸哉	
同	事業部 羅臼地区事業係	華学 光	

※1 議事概要の記述において、発言者の敬称・肩書などは省略しての記載とした。行政関係者の所属については、一部略称を使用した。

※2 文中、検討会議は適正利用・エコツーリズム検討会議の、WG はワーキンググループの、AP は河川工作物アドバイザー会議の、ML はメーリングリストの、IP 全体計画はインタープリテーション全体計画の、それぞれ略称として使用した。

＜議事概要＞

葉山：ただいまより、令和7年度第1回適正利用・エコツーリズム WG を開催する。開催に先立ち、釧路自然環境事務所の岡野より挨拶申し上げます。

岡野：本日はご多忙の中、適正利用・エコツーリズム WG に出席いただき感謝する。事務局を代表し、挨拶させていただく。今年は知床世界自然遺産に登録され 20 周年を迎えた。この貴重な自然を守り活かしてきた地域および関係機関の皆様のご尽力に改めて感謝申し上げます。各メディア等では、この 20 周年の振り返りが大きく取り上げられている中、エコツーリズム WG や検討会議では、様々な取り組みが行われてきた。過去にはエコツーリズム戦略の策定も行い、地域の提案により様々な取り組みを進めていくことで一定の成果を出してきた。一方で、新しい議論が出てこなくなっており、エコツーリズム WG やエコツーリズム戦略のあり方について、見直す時期ではないかと感じている。知床世界自然遺産管理計画のパブリックコメントも終了したこともあり、改めて知床の適正な利用や望ましい利用の在り方について議論を進めていければと考えている。本日は、エコツーリズム WG や検討会議のあり方について、どういった機能や役割を果たしていくか議論させていただきながら、エコツーリズム戦略の見直しを合わせて、新しい形で会議を進行できればと考えている。本日はこのような視点で皆様から意見をいただければと思っている。また、昨年度から知床国立公園地域で取り組んでいる IP 全体計画の進捗状況も報告をさせていただく。地域の皆様とワークショップを通じて地域の価値を掘り起こし、どんな体験が伝えられるか議論を進めている。その地域の価値をエコツーリズムの推進の一つの材料とできればと考えているため、IP 全体計画についても意見をいただきたい。本日は座長が変わるということもあり、新たな体制と限られた時間ではあるが、活発な議論をよろしく願います。

葉山：それでは、出席者と資料の確認をさせていただく。出席者については出席者名簿の通りである。なお、石川委員および石黒委員は WEB 参加である。石黒委員におかれては、途中予定があるため入退場される予定であること、ご承知おきいただきたい。なお、本日は WEB 併用となっているため、WEB 参加の委員は発言の際に可能な限りカメラをオンにし、発言時以外はミュートに設定をお願いします。資料は議事次第に記載された通りである。エコツーリズム戦略については付属資料含め一式を各委員および関係機関に一部ずつ配布しているが、会議終了後に回収させていただく。続いて、議事に先立ち、座長および座長代理の選出について、環境省から説明する。

二神：本日は議題に入る前に、エコツーリズム WG の前座長の敷田氏の退任に伴い、新たな座長および座長代理を選出したい。ついては、座長選出までの進行を事務局が務める。はじめに、座長および座長代理の選出方法についてだが、参考資料 2 の科学委員会適

正利用・エコツーリズム WG 設置要綱第 3 条第 2 項に、「ワーキンググループに座長および座長代理を置き、委員の互選により選出する。」と記載されている。事務局として候補者案を提案するため、検討の上意見をお願いします。事務局案として、座長は愛甲委員を候補として提案する。愛甲委員はこれまでの本会議に深く関わっており、会議の趣旨にも精通していることから座長が適任であると考えます。異議がないため、愛甲委員を座長として承認させていただく。

引き続き、座長代理についても協議する。事務局案として石黒委員および松田委員の 2 人を座長代理として提案する。石黒委員や松田委員には座長を補佐し、座長不在時には会議の進行等をしていただく想定である。こちらも異議がないため承認とする。それでは座長に選任された愛甲座長より一言挨拶を願う。

愛甲：北海道大学の愛甲である。暑い中、ご参集いただき感謝する。ただいま座長に選任いただきありがとうございます。前座長の敷田氏の元で科学委員会・エコツーリズム WG の委員に加わって以来、様々なことに関わってきた。議題が多い中での引継ぎであったが、会議やエコツーリズム戦略の見直しについて皆様の協力をいただきながら進めようと思う。前座長と違いスムーズに会議を進められず、これまでの雰囲気と変わるかもしれないが、ご了承ください。よろしくお願いします。

二神：それでは、以降の議事・進行については愛甲座長をお願いします。

愛甲：それでは早速議事を進めていく。議事（1）の知床エコツーリズム戦略の見直しについて説明をお願いします。

1. 知床エコツーリズム戦略の見直しについて

資料 1-1 知床エコツーリズム戦略見直しに係るロードマップ

…環境省・葉山が説明

資料 1-2 エコツーリズム WG と適正利用・エコツーリズム検討会議の位置づけ、検討体制、役割分担

…環境省・二神が説明

愛甲：資料 1-1 と資料 1-2 は密接に関係するため、合わせて説明をいただいた。エコツーリズム戦略の見直しにあたり、エコツーリズム WG と検討会議の会議体の位置づけと検討会議の運用を考えることで、エコツーリズム WG と検討会議の会議体の構成の明確化にも繋がると事務局より説明があった。エコツーリズム WG の委員には事前に意見交換会を行ったが、検討会議のこれからのあり方、運用方法について皆様より順番に意見を伺いたい。松田委員から何か意見はあるか。

松田：頭の中でまだ整理できていない部分はあるが、資料 1-2 で A 案と B 案を示していただいた。それぞれ一長一短であるが、資料 1-2 の 6 ページの提案型は非常に重要であると思っている。B 案の実行型にすると、地域の方に主体的に動いていただく部分が、どうしても受け身になってしまう。しかし問題は、提案型にした時に毎年のように様々な提案があるかどうかは難しいところである。そのため、可能かは分からないが、A 案と B 案の折衷案的な型式が必要であると思う。

また、もう 1 点気になったことは、資料 1-1 のロードマップにある実効性のある運用をどのようにしていくかである。エコツーリズム戦略は非常に重要ではあるが、戦略は戦術がセットでなければ事業が動かない。エコツーリズム戦略をどこで議論し、それを誰が実行していくか整理が必要である。検討会議など大きな会議体の中で、戦術まで議論することは難しいが、戦術を踏まえてエコツーリズム戦略の提案が議論され、次に戦術を具体的に議論する場が必要になる。

愛甲：次に間野委員お願いします。

間野：これまでのエコツーリズム WG と検討会議のやり方を見てきて、資料 1-2 の A 案では、提案をしてもそれを実行する手立てや予算が不足しており、提案制度が定着せず、新たな提案が出てこなくなっているという課題がある。しかし、B 案になると松田委員の発言のように、受け身の形となり、行政主導で地元は話を聞くだけの形になり本末転倒となる。これまでの運用を見てきて、提案制度が定着・継続できなかった問題は予算や体制に問題があったようにも思えるが、その原因を明らかにする必要がある。そして、解決するために何が必要なのかを関係者間で共有し、過去の課題を克服できるような実効性のある A 案の運用を目指すべきである。また、資料 1-1 下部に記載されているの「実行性」は、「実効性」であるか事務局に伺いたい。

二神：「実行性」と記載されているが、「実効性」が正しい。

愛甲：続いて、船木委員お願いします。

船木：間野委員と松田委員の発言にもあったが、運用案のどれか一つだけでなく、それぞれが重要である。必ずしも排他的な関係ではなく、地域が主体的に提案を行える仕組みを残すことが非常に重要である。一方で、これまでの議論を見てみると、具体的なアクションプランや明確な目標を掲げ、実行していく部分が弱く感じるため、さらに力を入れていくべきである。また提案型では、検討会議に出されたもののみが議論の俎上に乗ってくる。例えば、エコツーリズム戦略の具体的な方策では 8 項

目が挙げられているにもかかわらず、これまでの検討会議の中で等しく議論されていたとは言い切れなく、ばらつきがあったと思う。検討会議の中でも利益の還元の話をして良い。ある程度、エコツーリズム戦略に照らし合わせ、具体的な目標を定め、それを実行していくことがこれまで以上に必要である。

愛甲：WEB で出席している石黒委員が中座しているが、コメントをいただいているので、読ませていただく。「提案型をベースにするべきであると思うが、検討会議を経ないと決められないことが何なのか、を明確にしないと会議に『持ち込む意義』が見えなくなってしまう気がする。」
続いて、石川委員お願いします。

石川：これまでのエコツーリズム WG と検討会議の経験から考えると、エコツーリズムを展開することを考えた時に、個別の団体や事業所が主体となるケースが多い。これからそういった方に提案してもらうことが大事である。ただ提案の中で、個別の団体や事業者を考えはあるが自分たちだけでは対応できないことも十分にあり得る。そのため、その提案に意義があることを皆で議論できれば、行政機関にも実行者として関わってもらえるような、A 案、B 案のどちらかではなく、両方を兼ねるような要素を入れていくことが大事である。

愛甲：委員の意見をまとめると、A 案や B 案のどちらかではなく、地域の自主的な提案制度を残しつつ、実効性を高めることや明確な目標をエコツーリズム戦略の見直しで強調すること、必要に応じてアクションプランを作成すること、提案する意義を高めること、提案しやすい仕組み作りが必要であることと、石黒委員からコメントをいただいたように、検討会議に提案する意義をどのように作るかが重要な点であると思うため、以上のことを含め A 案と B 案の良い部分を折衷する形で運用してはいいかがかという意見であった。行政機関はこれまでも実際に提案を受け付け、運用に長く関わる中で様々な相談を受けていると思うが、何か意見はあるか。感想などでも良いので斜里町から何かあれば発言を願う。

南出：改めてとなるが、斜里町からはこれまでエコツーリズム検討会議の中で、知床五湖冬季利用やマイカー規制、カムイワッカ湯の滝の利用等について提案し、皆様に確認をいただきながら利用させていただいている。知床世界自然遺産の中で、管理させている場所でもあり、ルールをもって運用しなければならないため、会議の場は必要であると思っている。したがって、遺産地域内を利用するにあたって、スムーズな形で事業が進められないこともある。手続き関係や会議資料の作成についても町の観光協会や観光事業者も人員が厳しい状況にあるため、簡略化していただきたい

がら、より良い議論になる形で進めていただければと思う。

愛甲：羅臼町から意見はあるか。

三宅：本日提案の受付担当が不在ではあるが、概ね委員の方がおっしゃったことが重要であると感じる。斜里町からもあったように、羅臼町側も人員が厳しい状況である。地域の自主性や主体性の維持確保をしながら事業の支援をしていただけるような、提案しやすい仕組み作りを検討いただきたい。

愛甲：林野庁から意見はあるか。

川崎：実際に、林野庁が関わるのは、おそらく土地（国有林）所有についてだと思う。遺産地域内の大部分が保護林である森林生態系保護地域に指定されている。遺産の保護担保処置の一つであるため、検討会議の場で急に提案されると可否について返答が厳しい場面もある。地域の主体性も重要であり、検討会議にご提案される前に相談していただき、ご提案内容の可否について打合せた上で提案してもらう方がスムーズに進められるものと思う。斜里町からも（カムイワッカの）事業については、事前にご相談いただき、少しずつ話を進めている状況である。

愛甲：感謝する。非常に前向きな意見であったと思う。北海道から意見はあるか。

三井：先ほど、斜里町がおっしゃった意見と同じである。法律など可能な条件の範囲で協力させていただきたく思う。

愛甲：これまでの提案制度で提案される内容は、法的なことについては事務局が窓口で内容を確認した上で、相談する形であった。林野庁の発言にあったように、土地所有者などの相談も含め、事前に相談することで地域の労力などを解消できる提案制度に変えられればという意見であったと思う。概ね、皆様の意見として提案制度を残すことに異論はなかった。今後、いかに実効性を高められるか。そして、エコツーリズム戦略の目標の中に、現在記載されていない達成状況の評価をどうするのか考える必要がある。

また、本日の議論で具体的な話は出来ていないが、検討会議の下にある各部会とそれぞれ関係していることが特徴である。そして、2018年のエコツーリズムWGから単独開催に変更しているが、それまではエコツーリズムWGと検討会議は同時開催であった。さらに知床世界自然遺産地域連絡会議の下にも適正利用・エコツーリズム部会があるが、この部会は一度も単独開催がされていない。そのため、会議の

構成やエコツーリズム WG と検討会議の基本的な方向性と運用方法について検討する
必要があり、皆様から意見をいただきたい。環境省へ伺いたい、本日で結論を
出さず、次回検討会議で結論を出す形で良いか。

二神：その通りである。

愛甲：承知した。はじめに松田委員に伺いたい、開催方法や時期、回数など運用上のこ
とも含め、事業者としてどう感じているか教えてほしい。

松田：会議の回数や会議体については、私も非常に難しいと感じている。何が課題でどう
取り組むかによっても集まり方は変わるものであり、どう柔軟性を持たせられるか
が一つあると思う。

また、エコツーリズム戦略の目標について、具体的な数値が記載されていないた
め、どこへ向かっていくべきなのか具体性がない。皆が散り散りになってしまうた
め、どこまでを目標に実施するのかを共有できる形で示す必要がある。民間は事業
として収入がなければ取り組まない。知床をどのような場所にしたいかという部分
では、収益性のみではなく、学術的な見方が非常に重要である。例えば、単にガイ
ドツアーや参加者を増やすだけではなく、知床でどのような体験をしていただき、
5年後にどのようになっているか人数やガイドの質の向上について具体的に示す必
要がある。各ガイドは現状のガイドツアーが良いと思って催行していると思うが、
客観的に見ると違う場合もある。どのように努力すれば良いか分かるように、目標
値を設定すべきであると思う。私の事業所では羅臼湖のガイドツアーを行っている
が、正直に言うと羅臼湖のツアーは、採算性がなく止めたいと思っている。しか
し、会社の理念として、知床の自然は海から山まで連続した環境に価値があり、山
岳地域のプログラムを提供する必要があると考え実施している。他のガイドにも知
床の価値を伝えるために、どうすれば良いか分かる形で示していただければと思
う。

愛甲：この点について、他に意見はあるか。

間野：IP 全体計画に関連した話にはなるが、この点で重要なのが活動を通じて何を伝えたいのかである。その哲学について各々が考えながら運用できるようにバックアップ
することを意識していくことで、エコツーリズム戦略の見直しや IP 全体計画が全
部一体化していくはずである。エコツーリズム WG や検討会議、IP 全体計画のワー
クショップに関係した人がそれぞれの立場で責任を持って主体的に関われるよう
な形にし、強制されて行くのではなく、機運をどのように盛り上げる運用をしていく

ことが非常に重要である。単純な話ではないが、今までの運用を見てきて感じたことである。

愛甲：船木委員、何か意見はあるか。

船木：松田委員と同意見である。エコツーリズム戦略の目標は、非常に高い目標が掲げられているが、実施する手段については抽象度が高いと感じる。誰がどのようにして実施していくか考えなければならないと思う。

愛甲：石川委員は会議体について何か意見はあるか。

石川：資料 1 - 2 の 3 ページに A 案と B 案と示されているが、私は A 案の合同開催で、皆が共通の理解に達するということが非常に重要であると感じる。エコツーリズム戦略が作成される前の資料では、会議体の参加者の皆が共通に学び、それぞれが高め合うという文言があったと思う。それは今でも変わらず、知床のエコツーリズムを進めていく上で重要なことである。そのため、今までも様々な困難や課題があったが、今後も一同に会して実施していくことが良いと思う。合意形成に時間を要することもある。私は必ずしも提案型の事業の数が増えたから良しという訳ではないと思っている。数は少なくとも、合同開催として知床の価値を高めるような提案が一つでも二つでも議論され、時間をかけてお互いに理解しながら、それを基に皆が学べれば良いと思う。

愛甲：皆様から意見を伺うと、目標の具体性や会議の運用方法についても細かな修正が必要であると思う。前半に議論したように、提案制度は残しつつ会議は合同開催とした上で、実効性のある運用を行う。一方で、私の考えとして、B 案に記載されている長期モニタリング計画やエコツーリズム戦略の改定などの議論は、検討会議で行うと間延びしてしまう可能性もあるため、長期モニタリング計画やその評価はエコツーリズム WG が科学委員会の WG として責任を持って評価すべき課題であると考えている。WG と検討会議を切り分けた上で、林野庁からも話があったように事前の相談についても、事前にエコツーリズム WG を行った上で、検討会議に進めれば、より具体的な意見交換やどのようなサポートを行えるか考えられる面もあるため、以上のことを踏まえた運用方法を検討していただきたい。このことは、これまで敷田前座長が一番苦勞されていたことでもある。エコツーリズム WG の座長が検討会議の座長をしてしまうと、地域の関係団体が行政の後ろに並び、委員が前に並ぶ構造で、今までと変わらない。検討会議はあくまで平場として、委員と関係団体が平等に話し合う場としたい。資料 1 - 2 の 3 ページに記載されている「諮問」という言葉も

強い言い方であるため、「助言」をするような関係が望ましいと思う。また、過去には検討会議を通さなければ事業を実施できないのかという意見もあった。必ずしもそうではないし、実施してはならない内容の提案の場合には、受付の際に事務局や町側で確認されるため、そういった事態にはならないと思う。実施に対してマナー等で意見が分かれることやモニタリングの実施の部分に対しても議論があると思うが、その議論を柔らかに受け止め自主的な提案をサポートできる仕組みを考えていかなければならない。その方向性で資料修正を検討し、検討会議で地域の意見をいただければと思う。

船木：本日のエコツーリズム WG の開催前に愛甲座長と間野委員と共に岩尾別川の視察をさせていただいた。その際に、本会議で年 2 回集まるだけでは、お互いの障壁なくして意見交換を行うのは非常に難しい、という意見を述べた。視察のようなインフォーマルな場を活用してお互いの意見を共有しつつ、会議で話し合うことが理想であると思う。この会議以外の場でも、どのように関係性を構築していくかということも重要。それも会議のあり方を考えるうえでのポイントであると思う。

愛甲：非常に重要なことであると思う。今回の視察も、皆様と一緒にであるとよかったと、間野委員と船木委員で話し合っていた。

岡野：委員および関係機関の皆様、意見をいただき感謝する。まさにどうしていくかをこれからの検討会議で議論を進めて行ければと思っている。その中で、これまでのエコツーリズム戦略に掲げられている基本的な原則や視点は恐らく大きく間違えていないことも確認できた。知床らしい自然体験を、世界自然遺産の価値を伝え守っていくような利用を進めていきたい。そこで具体的にどのように盛り上げて進めていくかを検討するのが、本来の会議のあるべき姿であると思われ、提案制度も皆様にサポートしていく形が本来目指す所である。知床らしい自然体験や戦術について、会議の中で議論し合うことで、事業化できる形になると思う。以上のことを地域の皆様と議論した方が良く考えているが、委員の皆様はエコツーリズム WG と検討会議のどちらで議論した方が良いかの考え方についてアドバイスをいただければと思う。

愛甲：何か意見はあるか。

船木：今の質問は、IP 全体計画の話と繋がっている印象を受けた。地域で話された知床の価値からストーリーを作ってもらっており、次に活用方法についての検討になると思う。それを基盤にストーリーに基づく活動が行われ、そして最終的により良い知

床の現実には繋がっていくのではないかと思います。その最初のきっかけとして、IP 全体計画から入っていくのは方法のひとつではないかと思います。

愛甲：私も同様の意見であり、皆様と議論していく中で、IP 全体計画を作ること、作った後にどう運用するのか検討される。また、今のエコツーリズム戦略の中に具体的な役割分担についての記載がない。例えば、委員や行政機関の役割、実行する事業者の役割を明確に示し、エコツーリズム戦略の目標をどのように実現していくか整理していくべきである。また松田委員の発言にあったように目標に具体性を持たせた方が良い一方で、はっきりとした数値を目標に掲げることは難しいのではないかと思います。が、可能な限り具体的なものに近づけるよう今回の見直しで努力する必要がある。

岡野：意見に感謝する。IP 全体計画も進めているが、地域の皆様と一緒にどういう方向に向かっていくか、概ねの方向性が出ればと思う。そして、そのための提案制度でもあり、提案していただいた方と皆様に同じ方向性でサポートできるように目指したい。検討会議で提案しても意味がないと思われぬように、今後もそういった方向性で地域と議論を進められればと思う。

松田：会議体について意見を述べるが、どのくらい難しい課題なのか、どのくらい広い提案なのかによって変わってくる。深く議論をしない提案に対しては、検討会議に直接提案していただいて良いと思う。一方で、多くの課題がある提案などは、エコツーリズム WG 委員と必要に応じた行政機関で事前に話し合いの場を設け、否定の意見ではなく実施に対するアドバイスをした上で、検討会議に参集しなければ、議論の方向性が定まらない。委員はそれぞれ専門分野が異なり、見方や切り口が変わる可能性がある。委員が個別に意見を発言しても地域の方は困惑してしまうため、ある程度内容を共有・整理する場と、皆で議論する場の 2 段階を設ける必要がある。

愛甲：概ねエコツーリズム WG と検討会議の役割について整理できたと思われる。さらに地域の意見を伺い検討会議に諮りたい。

二神：今の議論から資料をまとめるにあたり、検討会議開催の前に委員の方にまた相談させていただきたく願う。

愛甲：続いて、資料 1 - 3 の既存の計画・ルール等との関係性、整理方針について資料説明をお願いします。

資料 1－3 知床エコツーリズム戦略見直しに係るロードマップ

…知床財団・秋葉が説明

愛甲：意見があれば伺いたいがいかがか。資料 1－3 の 3 ページ目には適正利用に関する経緯も記載されており、非常に多くの計画や提案がなされてきた。エコツーリズム戦略が策定されてからできた計画もあれば、それ以前の経緯も記載されている。エコツーリズム戦略上で参照していることや連携して進めていることもあるという説明であった。資料 3－3（別紙）については、これまでの運用の経緯や成果、議題を整理していただいている。今後はこちらも踏まえて整理していただくことになる。また、本会議の冒頭で岡野氏より説明があった知床世界自然遺産管理計画はパブリックコメントが終了した段階なのか。いつ頃、策定するのか伺いたい。

鈴木：知床世界自然遺産管理計画の進捗は、現在パブリックコメントが終了した段階で、今年度中に改定する運びで手続きを進めている。

愛甲：知床世界自然遺産管理計画は、知床世界自然遺産地域連絡会議で改定するのか。

鈴木：その通りである。

愛甲：それを受けた上で、エコツーリズム戦略の見直しを行うということである。他に意見はあるか。

船木：資料説明で、秋葉氏より計画やルール等の統廃合の必要性についてお話があったが、策定者の方は統廃合を実際に行えるのか伺いたい。また、策定者が統廃合についてどう感じているかも確認していただきたい。似通っている計画も多いと思うが、目的があって策定していることもあり、確認する必要があると思う。

愛甲：基本的に策定者は環境省釧路自然環境事務所が国立公園の計画として策定しているものが多いが、いかがか。

岡野：船木委員の発言の通り、策定した人がどう考えるかがポイントであると思う。計画等を策定した際は、それぞれに生じた議題があり、その議題にどのように対応するか整理し策定されている。その際に、関係市町村や行政機関の皆様と協議し策定したが、国立公園に関してのため環境省が策定したことになっている部分が多い。しかし、それを統廃合によりエコツーリズム戦略の中で共有のものにできることが可能であれば、全体もしくは知床世界自然遺産の計画等になっていく。現在、環境省

内部の手続きとして、管理計画等の国立公園の仕組みが包含されている計画もある。今後は世界自然遺産の計画に上げて一体化し、エコツーリズム戦略に記載すれば廃止することも可能であると思われるため、ルールや計画等の整理を進めて、地域全体の計画になれば良いと考えている。

愛甲：現在、知床国立公園管理計画はどのような状況なのか。2024 年度にヒグマに関する自然公園法改定に伴い、知床国立公園管理計画が一部改訂されているが、それ以前の改定はしばらく前であったか。

秋葉：知床国立公園管理計画の経緯については、資料 1 - 3 の 3 ページ目に記載されている。2021 年現在の整理ではあるが、既存のルールや計画、会議体の変遷をまとめている。イメージとして左側が国立公園関連で議論されたもので、右側は土地利用、世界自然遺産関係で整理されている。主に利用の観点より、網掛けしている枠が「場」で、線で囲われている四角い枠が計画となっている。また灰色で網掛けされているものは廃止・解散されたものである。

愛甲：知床国立公園管理計画は 2013 年に改定されている。エコツーリズム戦略の見直しについて進め方に異論がなければ、現在の整理の通り取り扱い方針に従い作業を進めていただきたい。分類等をブラッシュアップして、対応方針（案）を作成いただき、次回のエコツーリズム WG で検討させてほしい。さらに現在検討している項目として次の議題にある IP 全体計画や、地域で作成した知床半島将来ビジョンのゾーニングとイメージ（案）についても、皆さんで話し合い作成された地域規則的なものであるため、その内容をどのようにエコツーリズム戦略に取り込むかも、今回の改定の重要なポイントである。関係機関の皆様からは計画の取りこぼし等の指摘はあるか。林野庁から森林生態系保護地域の話があったが、その運用方針など個別に定められているのか。

川崎：知床はほとんどが天然林のため、人を介さない、手を付けない保護林として森林生態系保護地域に設定しており、その設定要領が定められており、その提供は可能である。

愛甲：森林生態系保護地域も関連した計画に位置付け整理した方が良いと思われるため、関連した資料として整理していただきたい。他に意見はあるか。

秋葉：先ほど議論したエコツーリズム戦略の実効性と関係する話になるが、実際に実効性がある計画は町の観光振興計画であると思う。例として、斜里町は独自の観光振興

計画があり、計画に基づいて実施すると思う。現在のエコツーリズム戦略や世界自然遺産の観光のあり方などと町の観光振興計画が上手く結びついていないようにも見えるが、どちらかを廃止するという話には当然ならない。計画は繋がっていないが、観光は自治体や民間が主体となって行っていくため、町単位で見た時に町の観光振興計画は実効性がある。もしくは予算処置を含め考えられている。実際に観光振興計画に基づいて動いていく部分も多い。今後の観光振興計画との関係は、エコツーリズム戦略の見直しや実効性の担保を考える上で、重要な観点になる。

愛甲：斜里町の観光振興計画の改定はどうなっているか伺いたい。

南出：斜里町の観光振興計画は 2024 年度に改定しており、2025 年から 2035 年までの 10 年間の計画で策定している。その中で知床国立公園内にあたる一部の利用の検討も含め組み込んでいる。斜里町としては策定した観光振興計画に基づき観光利用の推進を行いたいと思っている。斜里町の観光振興計画とエコツーリズム戦略がどういった関係になるかは現在の所見えてはいないが、エコツーリズム戦略策定に伴い繋がっていくのではないかなと思う。

愛甲：羅臼町の観光計画はどういった状況か伺いたい。

三宅：観光の担当が不在のため、回答を控えさせていただく。

愛甲：承知した。今後、羅臼町から情報をいただき、整理する上での参考としたい。また、エコツーリズム戦略や計画等を見直し、改定をする際は、現計画のレビューを用意していただきたい。改定前に計画の目標に掲げられていることが、前期間でどのくらい達成されたか可視化できればと思う。資料 1 - 3 の成果と課題の整理にも関係するため、達成状況を踏まえた上でエコツーリズム戦略の見直しの検討を進められればと思う。他に意見はあるか。

船木：今後、計画の整理を具体的に進めるにあたり、本日のエコツーリズム WG では、エコツーリズム戦略に記載されている計画の整理の具体的な話まで行わなくて良いのか。

二神：今回は資料 1 - 3 の具体的な作業手順を示させていただき、了承されれば、会議後より具体的な整理を事務局で進め、必要になれば委員の方に相談したいと考えている。

船木：資料 1 - 3 に記載されている取り扱いの方針や具体的な作業手順についての異論が特になければ、本日の議論は十分ということでした承した。

愛甲：地域のルール等については、次回の検討会議で皆様から意見を伺うことになるが、基本的に個別のルールが多い中で、エコツーリズム戦略の中に概念的に取り込み、関連計画をあげていくという整理になると思う。以前からある適正利用に関するルール等についても、エコツーリズム戦略の中に同様の内容が記載されているか確認してほしい。それでは資料 1 - 3 の既存の計画・ルール等の関係性と整理方針については作業を進め、共有・相談していただくこととする。それでは、休憩とする。

(休憩)

二神：後半を開始する前に、今回新たに座長、座長代理が新たに承認されたため、事務局から、新しいエコツーリズム WG の設置要綱を手元の方にお配りした。確認をお願いします。

愛甲：続いて、IP 全体計画の構成案と策定スケジュールについて、資料 2 - 1、2 - 2、2 - 3 の説明をお願いします。

2. インタープリテーション全体計画の進捗について

資料 2 - 1 知床 IP 全体計画の今後の予定と利活用

…環境省・伊藤が説明

資料 2 - 2 インタープリテーション全体計画策定に係る昨年度の検討状況

資料 2 - 3 知床インタープリテーション全体計画の構成案と今年度の策定スケジュール

…知床財団・秋葉が説明

愛甲：説明いただいた知床 IP 全体計画について、質問、意見などを伺いたい。今、間野委員から、資料 2 - 3 の第 3 部が 4 - 1、4 - 2、4 - 3 となっているが、これは 3 - 1、3 - 2、3 - 3 ではないか、という指摘があった。他に意見はあるか。

石川：細かいことであるが、表現や文言について少しコメントしたい。私は本日 Web 参加で、今示されている資料 2 - 1 が手元に来ておらず、今日示された資料 2 - 2 を私の手元では 2 - 1 になっており、少し分かりづらかった。このレポートについてはこれまでも議論があったと思うが、例えば資料 2 - 1 では知床 IP 全体計画と表記されているが、今日の資料 2 - 2 の 2 ページ目を見ると、一番上に知床国立公園インタープ

リテーション計画と、国立公園という文言が追加されている。また、資料2-2の2ページ目の文章を見ると、ですます調で書かれており、おそらく地元の方にこれまでの取り組みの概要を説明するのに使うのではないかと思います。先ほど秋葉氏から説明があったように、例えば全体で9回のワークショップを開催したといったことは、ここを読む限り記載されておらず、説明資料としても少し言葉足らずかなという印象を受けた。例えばIP全体計画という言葉を使うときに、資料ごとに揺れがないよう気をつけた方がよい。また、作成いただいたレポートの内容についても、特に私はWeb参加ということもあって少しわかりにくいところもあったので、わかりやすいように書いていただきたい。少し細かい点になるが、指摘させていただく。

愛甲：資料間での表現の仕方の違いについての指摘と考えるが、環境省はいかがか。

伊藤：ご指摘感謝する。資料2-2のレポートブックはまだ配布前のため、ご指摘を踏まえて修正をかけていきたい。

石川：よろしく願う。

愛甲：他にはいかがか。

船木：レポートブックを拝見し、文献からではなく、地域の方々が身近に感じていることを非常に丁寧に記述されているという印象を受けた。その上で非常に細かいことだが、インターネット上の情報を使用している箇所があるので、そういったものについては最終閲覧日をつけておいた方がよい。また全体を通して、町史から分かることが結構あるのかなという印象を受ける。このレポートブックに記載のある出典からの情報がダメという話ではなく、情報源として、町史をもっと活用してもいい。それと、ストーリーブックの第3部に知床の来訪者の分析という項目があるが、これはどういう意図で入れているのか伺いたい。

岡野：全国的な流れとして、それぞれの国立公園に実際にどういう人が来ているのかを分析し、ターゲットとなるペルソナを設定している。その上でその人に合った体験を作り、来訪者の興味関心に沿って、人生を変えるほどの体験の提供をぜひ国立公園で実現したいと考えている。その前提として、まずどのような方が来ているのかということと、その中でどのような方がこういったストーリーに共感するのかを考えていくために各地域で来訪者分析を行っており、知床においても来訪者分析を行っている。現状は目次だけできたところなので、それをどう活用していくかというのは、委員の先生方のご意見をいただきながら、具体的に意味のあるものを作っていくたい。今、

知床でどんな分析をしようとしているかについては、秋葉氏の方から説明を願う。

秋葉：岡野氏に説明いただいた通り、レポートブックの活用法や、レポートブックのストーリーをどう伝えていくかという方針を考える際には、来訪者のタイプや行動が重要になる。車で通り過ぎる人もいれば、様々なプログラムに参加する人もいる。それに加え、ストーリーを、パンフレットのようなもので伝えるのか、プログラムの中で伝えるのか、ビジターセンターのような施設で伝えるのか、そういったメディアと利用者の形態を組み合わせるストーリーをどのように活用していくかという戦略まで検討できれば、IP 全体計画として良いものになると考えている。また、船木委員から指摘のあった参考文献についてだが、町史はまさに一級の資料である。レポートブックはストーリーを比較的わかりやすく伝えることに重点を置いているが、レポートブックの内容についてより深く知りたい場合や、またレポートブックを人材育成等に使うとなると、レポートブックの情報だけでは不十分である。しかし情報を詰め込みすぎると文章過多になってしまうため、より深掘りできる情報にリンクさせるというイメージで、レポートブック本体も作っていききたい。

船木：ブランディングとマーケティングの観点から来訪者分析を行うということだと理解した。資料 2-1 にはインナーブランディングという地域向けのトピックが記載されているが、ストーリーを作っていく際に、知床の内部の人間が受け入れられるストーリーであることももちろん、ブランディングは外部からの目線を意識して行うことが重要である。資料 2-1 に記載されている順番通りに作業を実施しているわけではないと思うが、来訪者の分析を行い、それを踏まえて並行してストーリー作成していくと、知床の方々のみだけでなく、外部の人にとってもより魅力的なものになるだろう。また、環境省に質問だが、レポートブックの作成にあたってワークショップに参加していただいた方々の名前などを掲載するのは難しいのだろうか。作成者の一人として名前を掲載したり、あるいは顔写真等を掲載したりすると、レポートブックと一緒に作ったという雰囲気が出るし、参加者も、自分たちが参加したものという実感をもてる。ワークショップの際に許可を取っていなければ難しいとは思いますが、そのように感じたので、指摘させていただく。

岡野：参加型で IP 計画全体を作成していく意味を形にして残すのは意義のあることであり、検討したい。それからもうひとつ、この機会にお尋ねしたい。今回、地域のワークショップの中で出てきた言葉を集めてストーリーを作成しているが、ストーリーを作成する過程できれいになり過ぎている部分もあり、リアルな参加者の言葉をもう少し掲載した方が良いのではないかという思いもある。その辺りのまとめ方についてアドバイスをいただきたい。それからもうひとつ、これは情報の整理に関することだ

が、テーマを4つ、産業・暮らし・食、地理・地形、自然、伝統・文化・歴史、と分類しているが、実際は地理、地形があって、そこに植物や動物がいて、それが生業の中で産業になって、それが積み重なって歴史になるという風につながっているように思う。それをレポートブックのようにカテゴリーに分けた方が伝わりやすいのか、それとも、ひとつのテーマで地形から始まって、といったストーリーを書いた方がいいのか、というところで迷っている。もちろん、アクティビティやプログラムを作成する際に、それぞれに分類した要素を組み合わせ、まず地形から入り、生き物を見て、そして最後、食で文化につながる、というような形を2泊3日でやるということもこれからあるだろうが、そういう場面でレポートブックを活用する際に、テーマを分けておいた方がいいのか、それとも要素をつなげたストーリーとして記述した方が面白いのか、そのあたりもまだ検討中である。知床らしさを表現するのに要素をカテゴリーに分けてレポートブックに記載した方が良いのか、つなげた方が面白いのか、委員の先生方からご助言をいただきたい。

愛甲：活用の仕方も含めて、何かアドバイスがあれば。

松田：まだ私も中身についてわからないところがあるので的を射た回答になるかどうか分からないが、まずひとつ、誰をターゲットにするかによって要素をつなげた方がいいかどうかというのは変わってくる。レポートブックは日本人をターゲットにしているという認識でよろしいか。というのも、日本人から見た視点と外国人から見た視点では、価値を感じるものが変わってくる。細かいところでいうと、例えば3ページ目、「私たちの日常は、地域の外の人たちから見たら非日常なんだね。」という文言があるが、より正確には、日常と対比されるものは異日常である。来訪者はどこまでのものを日常として体験するかによるが、例えば、知床の方が日常的に食べているものは、他の地域の人が普段よく食べているものから見ると異日常である。他には、例えば知床だとヒグマに遭遇することもあるが、同じようなことは他地域では起こらないため、異日常というよりは非日常である。そういう部分を細かく詰めていかないと、ストーリーを作る際に混沌としてしまう。本当は岡野氏が言われたように、全ての要素がつながっている。まず緯度があり、その上で地形や海流などで気象が決まり、それによってその場所に住む植物と動物がいて、それを利用していた昔の人たちの生活がある。レポートブックにそれらがつながった形でわかるように記載されていればいいが、それらの要素をつなげて記載するには、派生している部分を相当削らないと難しくなると思われる。そのため、レポートブックのようなカテゴリー分けをしておく必要はある。しかし、例として要素のつながり部分をひとつ示さないと、一般の人からするとわかりにくいだろう。また、レポートブックを読む人がどれだけの知識があるかによっても変わってくる。そのため、レポートブックをガイドに対して出すの

か、地域の人達に出すのか、研究者の方たちがわかりやすいように出すのかによって、書き方、掘り下げ方、要素のつなげ方というのは変わってくる。読み手のターゲットをどう考えるかというのも重要である。

船木：レポートブックに記載されている4つのテーマがつながっている気もするという話だったが、確かに今の分類だと、自然、地形、文化という風に、既存のカテゴリーをもとに整理されている印象を受けた。他にも、どちらかというとボトムアップ的に個別の情報を整理していく方法があり、最も代表的な方法としてKJ法がある。この方法は、最初に既存のカテゴリーに入れ込んでいくというよりは、直接出た発言をもとに、直感的に、近いとかんじたものをグループ化していき、小カテゴリーからだんだん大カテゴリーへと分類していく手法である。個人的にはこちらの方が望ましいと思うが、一方で、レポートブックの活用ということが最終目標にあるため、実際に観光客にこういう風に地域を回ってもらいたいという考えがもしあるのなら、それに基づいてストーリーを組み立てていくというのも一つの手だと考えられる。もう一つ、ストーリーがきれい過ぎると岡野氏から発言があったが、客観的な情報、文献情報に基づいて構成しようと意識した結果だと考えられる。先ほどの秋葉氏の説明では、地域の方々向けにということだったので、そういう意味では、レポートブックの内容がどういった情報に基づいているのかを参考文献で確認できるというのはよいと思う。一方、レポートブックをもとに観光客向けに何かを作っていく場合は、むしろワークショップで皆さんが発言された言葉をそのまま活かした方が瑞々しさや生き生きした感じが出るだろう。また、文献情報だけでなく、証言も肝要である。私もインタビュー調査を行うことがあるが、ワークショップでの皆さんの発言も、文献と同等の価値を置いてもいいのではないかと考えている。実際に集まってくださった地域の方々の発言をなるべく活かす方向が、私は良いと思う。るのが長くなったが、以上である。

愛甲：間野委員から何かあるか。

間野：レポートブックをどういうスタイルで見せるかという話だが、同時に全てのスタイルを実施することはできないので、何かを選択するしかない。スタイルの選択は好みもあるが、一番何を利用して見せたいか、誰に見せたいかという示しやすさが大切と思う。レポートブックを通して読んでいくと、全てが関連している。例えば、流氷から始まり、海でこのようなことがあり、海と陸とのつながりがあって、海の豊かな恵みを地元の人たちは謳歌、享受していて、旅行者もそれを楽しむことができる、という風に、全てが関連している。旅行者はもちろん自分が一番興味のあるところからレポートブックを読み始めと思うが、その部分をずっと読んでいくと、別の箇所とつな

がっている、あるいは別の箇所から読み始めたとしても同じ箇所にたどり着く。このように、ひとつのものを様々な角度から眺めることができたと気づくように、全体を構成することを意識し作成すると良い。それから、私からも質問だが、ストーリーブックに準じたツアーや新しいプログラムを作ることで、ある意味で地元の事業者の方にとって、何か新しいことを始めるときに一つの有効な補助になるということか。今、観光庁事業のサイトを確認して、これまでにどのような事業があり、補助金が出ているのかを調べると、例えばオーバーツーリズムの未然防止抑制に関する持続的な観光事業推進に補助を出す、というものがある。今、知床にふさわしい、そのような補助金は、どういうタイミングでどのように採択されるのか。これは本来観光庁に伺うべきかとは思いますが、例えば環境省で分かることがあれば、ご教示願いたい。そういったことが地元の業者の方にも理解されると、IP 全体計画が完成した後、今後 10 年ほどの間に、効果的な使い方につながられるだろう。

岡野：観光庁事業との連携は、現在環境省の本省と観光庁でも様々なことを進めているところであり、特に国立公園で事業を行う場合は事前に相談をしていただく体制を構築している。その中で両省共通で今後推進していきたい利用のあり方、観光のあり方として、ストーリーに沿った地域の高付加価値化がキーワードになっている。その地域ならではの価値を調べた上でその地域ならではのストーリーを紡ぎ、それを体験価値にして利用者の満足度を上げ、結果として高付加価値化につながるという考え方であり、そのような事業を行う際にストーリーに沿ったものであるという要件が、様々な募集要項に記載されている。事業に応募する際に既に地域の中でストーリーを作成し、それに沿っていることをアピールすれば、採択者から見て、採点時にストーリーに沿っていることが評価できる。この辺りについては、現在観光庁でひがし北海道における高付加価値な観光地づくりを実施しており、そうしたところとも相談をしながら進めてきているため、資料 2-1 のような書き方をしている。本会議には北海道運輸局も参加しているので、このような場所でも適宜情報共有をしていただき、この場で議論している知床らしい自然体験の推進についてサポートをいただき、共に連携できたらと考えている。

愛甲：私からもお訊きしたい。まず 1 点、今回提示されたレポートブックはワークショップ参加者へのフィードバックとして作成されているが、ここに記載されている 9 つのテーマの卵を基に、資料 2-3 によると 15 から 20 程度のストーリーを作成することを想定しているとのことだった。それをどのように作成するのかをお訊きしたい。それから 2 点目、IP 全体計画という計画書がストーリーブックのことなのか、IP 全体計画という計画が別途あり、それを活用してもらうためのものがストーリーブックなのか、その違いが理解できていないため、質問させていただきたい。

岡野：今作成しているものが IP 全体計画であるという認識である。資料 2-2 に記載があるように、ストーリーを整理し、具体的にどのような体験ができるかも含めて整理をして、この先にどのような媒体でどうやってストーリーを伝えていくか、というところも作り込んでいくと計画になる。今はまだそこまで作り込めていない部分があり、また、インタープリテーションという言葉がなかなか地域等にも浸透していないため、わかりやすい言葉で伝えるためにストーリーブックという名称を現在使用している。従って、現状ではまだ作成し切れていないと個人的には思っているが、作成しているのは IP 全体計画で、それを地域の方に理解いただくためにストーリーブックという言葉を使用している。

愛甲：そうした理由で、IP と IP 全体計画とは何か、というような説明が目次の最初のところにあるということか理解した。他、いかがか。

松田：このストーリーブックは、どちらかというと地域の人たちが伝えたいことを中心に組み立てられているが、本来の IP 全体計画というのは、知床国立公園の果たす役割は何か、その上で何を伝えていかなければならないのか、という視点も必要であると考ええる。そうすると、学術的な価値は何なのかを一般の人達がわかるような形で作成する必要があるのではないか。現在作成しているのは地域の人たちが地域を理解した上で、来訪者の人達に知床を好きになってもらうきっかけを与えるものであって、本当にその知床の価値を高めていくためには、学術的な価値を伝える必要もあると、個人的には考えている。

岡野：まさにご指摘の通りである。地域の中から出てきた意見と同時に、学術的な知見とを組み合わせるストーリーを作成できたら良いと考えており、他の地域では、ワークショップを行って抽出された資源や体験したいものを専門家に整理、ストーリー化してもらって、ストーリーに学術的な価値を加えるという手法も用いられている。知床 IP 全体計画でも、今後ストーリーをまとめていく際には委員の先生方のお知恵をお借りしたいと思っており、そのようなヒアリング等もお願いしていきたい。

愛甲：それは他の WG も含めてということで良いか。ストーリーブックは今年作業を進めて策定されるということで、ストーリーブックをどのようにエコツーリズム戦略の改訂に活かしていくのかというのが、おそらく次の課題になる。それについては、また追って議論したい。他に意見がなければその他の議題ということで、まずは資料 3-1 の説明をお願いしたい。

3. その他

資料 3－1 岩尾別川のヒグマ問題

…環境省・伊藤が説明

愛甲：今、共有いただいた資料 3-1 については、昨日開催されたヒグマ WG でも同様の報告を受け、色々と議論になったところである。委員から意見を伺いたい。

間野：昨日のヒグマ WG でも、本件は非常に重大な案件として認識された。岩尾別川のヒグマ問題、あるいは知床公園線におけるヒグマ渋滞、ヒグマへの接近は、長期にわたって問題になってきた事案であり、資料 3-2 の 3 ページにあるように、これまでも、マイカー規制のためのバスデイズといった対策に取り組んできた。従来の対策では根本的な解決にならないことは重々理解している。昨日のヒグマ WG でも同じ話になったが、我々が最も恐れているのは、万が一、利用者とヒグマとの間で人身被害が発生し、最悪被害者が死亡した場合、発生する影響は当事者を越え、知床の社会全体にも及ぶ看過できないものになる点である。幸い現在までそのような事態は発生していないが、万が一発生したときに、社会全体が被る損失を考慮すると放置できないが、バスの運行には費用負担をはじめ解決すべき課題が多い。これは今わかったことではなく、数年前からエコツーリズム WG でもバスデイズの問題等でも取り上げられてきた。しかし、未だにこれに対する明確な方針が定まっていない。今日の午前中に現場を見て回って、今日はたまたま誰もいなかったが、非常に問題である。一番強調したいのは、今後の知床でのエコツーリズムを考えていく上で、ヒグマに関するリスク管理を抜きに、ありとあらゆる野外活動は成り立たないということである。そして、これは事業者が提案して何か対策を打つような問題ではなく、公的な組織がインフラを整備して安全な運用を行わなければならない課題なのだとすることを、まず関係者で共有し、その上でどのように進めなければいけないかを一定の期間で明確に示すことが必要なのではないか。民間ではなく行政の方から提案があり得るという話もあったが、まさにこの課題がそれに該当する、あるいはこれをおいて他にはないのではないか。まずその辺りの認識について、関係者間で今後確認した上で、どのように進めるかという具体的な話に進む必要がある。

愛甲：他、いかがか。

船木：本日午前中に現場を見て回った。この問題点として、交通渋滞、そしてカメラマンが危険な距離まで接近していることに加え、ごみの不法投棄もあった。誰が投棄したかは不明だが、道路からは確認しづらい箇所、賞味期限が 2 週間前の弁当の容器があった。あるいはそこで用を足すなど、そういった問題も起こっているということだ

ある。こうした行為も、問題個体を発生させる深刻なものであると認識している。単に人がヒグマに接近しているということだけではなくこれら行為の発生も問題として認識しておく必要があると思う。

愛甲：松田委員からお願いします。

松田：岩尾別川、ヒグマの問題は早急に解決しなければならないが、一方で知床国立公園をどういう国立公園にしていくのかという議論を行わないと、一時的な対症療法で終わってしまい、根本的な解決には至らないと考える。全てではなく一部のヒグマについて、この20年ほどでヒグマの行動は大きく変化してきている。現在はヒグマが人を避ける、人がいてもあまり気にしない、という状況だが、今後、人を餌として認識するヒグマが出てきてもおかしくはないし、人を嫌だと思ったら攻撃してくるヒグマも現れると思う。そうした状況を踏まえ、クマの社会も変わっていくのかもしれないが、将来を見据えた上でどういう対策が必要なのかを議論する必要がある。しかし対策を実施するには財源的に厳しいところがあると思われる。そのため、この場で話すべき議論ではないかもしれないが、個人的には、入国税を徴収すべきだと思っている。この後に議題になる知床五湖の高架木道のようなインフラは、日本人の税金で整備している。しかし、観光庁や環境省は今、外国人観光客を積極的に誘致しており、日本人の税金で整備したインフラを、言い方が悪いかもしれないが、外国人に無料で利用させることには疑問を感じる。そういったインフラを使用してもらうためにはそれなりの負担をしてもらうという、そういう国の仕組みも必要ではないかと私は思う。そうしなければ、この問題に対してはいつまでも議論に留まり、実効性のある対策を出すのが難しい。そういった意味でも、今後国立公園の利用をどうしていくのかという、もう少し広い範囲の議論を国全体で行っていただかないと、この種の問題は解決しない。

愛甲：私からも意見を申し上げる。2023年のヒグマの大量出沒を受けて、推定されるヒグマの個体数自体がかなり減っている中でも、昨年度の利用者の問題行動に起因する危険事例の発生件数はかなり増加しており、前年の倍以上になっていると聞いた。昨日のヒグマWGでの説明では、前年ではできなかった巡視等の頻度が上がった結果であるとのことだったが、そうだとでもかなりの件数である。これは、ヒグマの数は減っているはずなのに軋轢は減っていない、利用者に起因する危険事例は減っていないということである。そのため昨日のヒグマWGでは、2013年に科学委員会から出した、岩尾別川のカメラマンによるヒグマの人馴れの危険性を訴える緊急声明と同様の声明を出した方が良いという意見が多く出て、ヒグマWGから科学委員会の委員長に、声明を出すことを要請するという話が出ていた。これはエコツーリズムWGの間

題でもあると思っており、できればエコツーリズム WG からも、ヒグマ WG と共同で、同じように科学委員会としての声明を出すことを提案したい。ただし、カメラマンに限らず、カメラマンが集まることに付随して一般観光客も車を止めてヒグマ渋滞が発生し、さらに人々が車から降りるといった危険事例が発生しているため、一般の方々にもわかるような形で、元々行っているディスタンスキャンペーンの意図をさらにきちんと伝えるような形で出す必要があると思っている。ヒグマ渋滞は9月の下旬、おそらく中旬以降がピークになると思うが。次の科学委員会開催は10月の予定のため、科学委員会開催を待っていると、また同じような事象が今年の秋も発生してしまう。そのため、できるだけ早目にそういった対応ができるように検討したい。皆様の賛同がここで得られれば、ヒグマ WG の佐藤座長と相談して進めさせていただきたい。また、先ほども説明があったが、リモートカメラを設置して現地の状況がわかるようにしてはどうかという提案が知床財団の方からも出ていると伺った。本日の午前中に現地の下見を行ったが、私の方で考えているのは、私と知床財団との共同研究という形で、現地にタイムラプスカメラを設置し、少なくともどのぐらいの渋滞が発生するのか、どの辺りに人が集まるのか、何人ほどが車から降りているのかを把握できるような調査を実施したいと考えている。そして、ここでいきなりの提案になるのだが、可能であれば環境省とも共同で調査を実施したい。少なくとも現状の把握自体は河川工作物 AP から要請も出ており、環境省と共同で調査が実施できればいろいろと手続き的な問題をクリアできる。可能であれば管理者とも協力してやればという思いから、この場で提案させていただく。石黒委員が手を挙げているので、発言をお願いする。

石黒：遅れての参加となり、申し訳ない。愛甲座長から非常に総括的なお話があった後で恐縮だが、2点ほど意見を述べさせてほしい。岩尾別川のヒグマ渋滞に関して、特に一般の通行が阻害されているという状況があるのであれば、警察との連携をより積極的に考えるべきなのではないか。先程の松田委員の発言にも近いが、現在、国が観光の影響への対処を積極的に行っている。私が関わっている美瑛や北広島といった事例も出てきたが、今までこうした地域外からの観光流動と警察との連携はあまり積極的ではなかった。しかし現状少しずつその辺りの垣根がなくなり、様々な具体的なプロジェクトが動いている。愛甲座長が提案された状況のモニタリング、あるいは対症療法は非常に重要だが、議論を一步前に進める上では、そうした警察との連携を考えてみたら良いのではないか。従来も情報の提供・共有等を行われてきたと思うが、具体的な行動を伴った連携へともう一步踏み込むために地元の駐在・警察署のレベルではなく道警、警察庁等とも議論を始めるべきではないかというのが1つ。2つ目は、来た人に対する情報発信について、この会議には斜里町も参加しているが、斜里町では知床しゃりアクティビティサポートセンターの一つのツールとして新しいウ

ェブページを運用している。こういった情報は出し過ぎて困ることはないと思うので、是非行政の垣根も超えて積極的に情報発信されるのがいいと思っている。

愛甲：発言感謝する。斜里町と知床財団からコメントがあったらお願いします。

南出：ヒグマの問題はここ数十年来の課題であり、未だ具体的な解決策を見出だせていないが、私も松田委員が発言されたように、まずは国立公園全体としてどうあるべきかという方針を、改めて国に示していただきたいと思っている。それを踏まえて、先程石黒委員からもご指摘のあったところだが、クマ問題については、交通の問題と人がいることによる人身事故の問題と、2つの側面があると思っている。交通の問題で言えば、先程石黒委員からあったように、美瑛の方ではセブンスターの木の関係で特定の時期だけ交通規制を実施するという新聞報道があり、北広島の方ではエスコンフィールドの方で交通渋滞があるので一部区間だけ駐車禁止にしたりという動きも出てきており、そのような警察との連携も必要と考えている。また、現在、環境省では法改正してヒグマとの距離をとってくださいという取り組みも行っているが、現状それが実効性のあるようなところまで至っていない。それももしかしたら警察との連携が必要なのかもしれないが、その辺りをもう少し、実効性のあるものに変えていく必要があると感じている。

玉置：議論の中でお話が出ていたように、今まで知床財団をはじめ関係機関で取り組んできたことというのは、規制に限らず、来訪者にいかに良い体験をしていただくかということが第一義と考えている。当財団もヒグマ管理業務を請け負っているが、ヒグマのように元々見えてしまうものに対してどう見せていくのかという観点は非常に重要である。中村委員長からも言われていたように、ダムを解消して、岩尾別川に魚が上がるようになって、ヒグマの生き生きとした姿をあそこで見られるというところをわざわざ規制をして見せないとなると、正直、知床が世界遺産になった価値はどこにあるのかと甚だ疑問に思う。その部分もあわせて、岩尾別が、規制だけではなく、いかに素晴らしい体験を提供できる場所にならないかなというのを常々、現地管理を行う上では考えている。その結論は未だ出ていないが、委員の皆様のお知恵を拝借しながら、改めて我々としても方策を考えていきたい。

愛甲：石川先生の手が挙がっているので、お願いします。

石川：岩尾別川のヒグマ問題はエコツーリズム WG 単独の問題ではないと先ほど愛甲座長が述べられていたが、同感である。ひとつの観点として、私が座長をしているエゾシカ WG での経験を共有する。一昨年、知床岬でエゾシカの個体数調整の事業を実施して

いる方がヒグマに遭遇して怪我をするという事案が発生した。この事故については、直前にエゾシカ WG 内で、この個体数調整事業はヒグマと接近する可能性が高く危険であると指摘されていたにもかかわらず、対策が後手になり、エゾシカ WG のおよそ 10 日後にヒグマによる人身事故が発生してしまった。この問題を考えるときに、間野委員からの指摘にあったように、まず根本的なリスク管理の問題でもあり、エコツーリズム WG の問題というよりは、ヒグマ WG、河川工作物 AP にも関わりのある、横断的な課題であると捉えてほしい。したがって、抜本的な改革が必要であり、私の個人的な意見としては、例えば岩尾別一帯を駐車禁止にするというような、強力な規制をかけても良いと考える。その必要性を、科学委員会から、地域の方々や、世界遺産や道路を管理する方々に考えてもらえるよう説明する。ただし、先ほど玉置氏から意見があったように、この地にもともとある資源をどのように見せるか、という視点も重要である。例えばガイド付きのバスツアーを行うなど、色々方法はある。そういった対策を取ることは可能だと思うので、まずは愛甲座長から提案があった、岩尾別川のヒグマ問題を、全体の問題として科学委員会から声明を出すことに賛成する。もう一つは、岩尾別一帯に規制をかけ、それからさらにその中で見せることについては別途方法を考える必要があると考える。

愛甲：ここまでの意見について、環境省の方から何かコメントはあるか。

岡野：ここまで皆様に議論いただいたように、岩尾別川のヒグマ問題は非常に大きな長年の問題であり、かつ近年その重要度を増していることは指摘の通りである。こうした状況を踏まえて、環境省では自然公園法を改正し、ヒグマへの餌やり、過度な接近、つきまといに対して罰則を科すことができる法改正を行った。ただし、この罰則は環境省の指示に従わない場合に適用できるものであり、昨年からは警察とも連携して、対応しているところである。そういった対応も含めて 70 数件という件数となっており、努力量も上がっていることもご理解いただきたい。その中で、今知床としてヒグマにどう対応するのかを考えなければいけないというのは、まさにその通りである。そしてそのような方針を決定するのは、おそらく科学委員会ではなく、地域連絡会議、あるいはそのエコツーリズム部会等であり、やはり地域全体でどうしていくのかを考えていかない限り、答えは出ないと考えている。環境省は、規制をするツールを一生懸命磨いていて、できるのは規制である。ヒグマを来訪者に見せたいということであれば、その手法を地域で議論をして、その方法を具体的にどうすれば、経済的なことも含めて実現できるのかを考えるべきである。個別に議論しても、どこかで反対とか、ここは違うという議論に必ずなるので、地域の観光の考え方も含めてトータルで答えを出さなければならない。各々が持っているツールを同じ方向に向けて活用するためには、そういった地域の機関でしっかり議論を進めることが重要である。

愛甲：山本氏が手を挙げているが、発言はあるか。

山本：皆様から多くの意見が出た後で恐縮ではあるが、補足させていただく。一つは先程石黒先生からあった警察との連携についてだが、実は現場ではもうかなり警察に協力いただいている。渋滞が発生すればすぐに警察に連絡をして渋滞を解消するというのを、繰り返し実施している。ただし限度はあり、ウトロの駐在員は2人しかいないため、例えば事故が起きればそちらに人員は割かれ、全体としてはなかなか満足にはやりきれないという現状がある。まとめると、警察との連携は行っていて、そこには限界があるということが一つ。そしてもう一つお話ししておきたいのが、松田委員からあったように、やはり知床国立公園全体でどのように利用を位置づけていくのかということを、できればエコツーリズム WG で深く議論いただきながら、科学委員会全体でも議論を深めていただきたい。例えば、今、ヒグマを前提とした利用システムが構築できているのは知床五湖のみである。他にフレペの滝遊歩道はどうなっているかという、ヒグマが出ればすぐに閉鎖するという状況が1週間で何度も発生している。そのため、どのように国立公園に入る手前でヒグマの存在を前提とした利用を来訪者に周知し、あるいはシステム化していくかということを考えた上で、3年後、あるいは5年後にどのような知床にしていきたいかということを深め、皆様の意見を伺いながら、現場もそれについていきたいと考えている。その上で、愛甲先生に提案いただいたような現地でできることを、今年でも来年でも1つずつ積み上げていくことも並行してやっていきたい。WG の会期開催を待っていると、なかなか現場にはスピード感を持って導入できないので、やれるチームで少しコアに話をしながら、例えばカメラ設置を今年中にできるのであればやりたいし、監視員の配置もできる範囲で小屋を作って配置してみるなど、1年1年やれることを積み上げながら、その上で並行して3年後、5年後のプランを考えたいと思っている。

愛甲：先ほどの岡野氏の話にもあったように、まず河川工作物 AP からの提案があつて、さらにヒグマ WG、それから今日のエコツーリズム WG でいろいろとご意見いただいて相談したところであり、科学委員会としてもこれを見過ごすわけにはいかないというのが WG のメンバーでの意見だと思われるので、中村委員長とも相談の上、科学委員会として考えたい。また、先程岡野氏が言われたように、実際にどのようなアクションを起こすかを決めるのは、まさに WG と地域の検討会議や地域連絡会議の役割だと思うので、そこできちんと検討してもらえよう持ちかけるのも、科学委員会の役割ではないかと思う。そして実は、この件はエコツーリズム WG としてエコツーリズム戦略を見直す際の、一つの良い事例になるかもしれないと思っている。課題に対してどう対応していくかというところが、提案を行うのみの今の戦略では不足している

部分であるので、先ほど述べたように、ヒグマ WG の佐藤座長とも相談しながら、具体的な取り組みを進めていきたい。それでは、次の説明事項、知床五湖の高架木道について、資料の説明をお願いします。

資料 3－2 知床五湖園地 高架木道の更新について

…環境省・二神が説明

愛甲：今の説明について何かご質問等はあるか。これから基本設計を行うということなので、点検の結果も踏まえて計画を立て、またその状況を踏まえて利用者負担も検討されるとのこと、理解した。本件は地域への影響も大きいと思うので、丁寧に説明しながら早めに情報共有して進めていただけるよう、お願いします。それでは続けて資料 3－3 について、説明をお願いします。

資料 3－3 知床世界自然遺産登録 20 周年事業「世界遺産と地域」企画の進め方について

…知床財団・玉置・秋葉が説明

愛甲：この企画の提案について、何か質問があればお願いします。先ほども少し触れたように、今回のこの企画は特にエコツーリズム WG でやらせてもらえると、戦略の見直しのポイントを整理するちょうどいい機会にもなるだろうと思う。既に資料もそういう観点でも作成いただいているので、その辺りを踏まえて対応していきたい。委員の皆様にもぜひご協力をお願いしたい。それでは以上で、この WG としての議事は終了する。

葉山：本日は長時間にわたり活発な議論をいただき感謝する。以上で、令和 7 年度第 1 回適正利用エコツーリズム WG を終了する。

(閉会)